



本会記事

■富山の核融合エネルギー連合講演会に参加して

今回、富山の会合にご案内をいただき、ITER 事業に関わることになって初めて学会の皆さんに直接、話をする機会となりました。

昨年の秋に、ITER 協定の下に新設されることになる機構の責任者に指名されたわけですが、とたんにこれに驚くほどの時間を費やすこととなり、今年3月にはクロアチアの大使を辞し、早々にここカダラッシュに赴任をしました。したがって、国内の主だった核融合関連の研究施設を見ることもなく、また広く関係者の話を聞くまもなく、赴任と同時にフルに ITER 建設プロジェクトに取り組む毎日を始めてしまったわけです。

現在、国際チームのリーダーとしてドイツのガルヒンクと日本の那珂、そして新しくサイトとして決まったカダラッシュの3カ所に分散している部隊を、今年末を目途にカダラッシュに統合すること、そして新しいメンバーを加えて、建設に取り組む組織へと変身させることが当面の重要な課題です。

ITER 協定に日本、EU、米国、ロシア、中国、韓国そしてインドが加わったことから組織の構成については参加各極の出資比率に応じたものとするのが求められますが、日本は欧州について大きな貢献を期待されており、今回の富山の会合でも私は現状をご報告することとあわせて、ほぼ10年と長い建設期間も含めて、このプロジェクトに日本からできるだけ多くの方々に関心を持ち、参加してもらえるように呼びかけることを目的としました。

富山に旅立つ1ヶ月ほど前のこと、思いがけずカダラッシュのある南フランス、プロヴァンスの大学で、核融合の理論研究で造詣の深い九州大学の伊藤早苗先生が名誉博士号を授与される機会に接し、フランスの地元の大学における取り組みを知ったこともあって、なおさらに日本でも大学を含めて、ITER プロジェクトを支えてもらうために多くの組織に応援していただく必要性を感じるようになりました。

文部科学省に応援してもらうことは当然のことですが、原子力研究開発機構、核融合フォーラムだけでなく、プラズマ・核融合学会にも、研究者、技術者の派遣や交流の推進に積極的に取り組んでいただくことを期待します。

日本からの帰途にローマに立ち寄り、欧州物理学会のプラズマ物理会議に参加し、ITER の報告をした折りにもまたあらためて感じたところですが、各国の幅広い研究者と有機的な協力関係を築いてゆくことは ITER にとって大切な課題であると考えています。

今すでに南仏プロヴァンスは夏の真っ盛りです。フランスでも極めて日照時間の長い当地では太陽のエネルギーを地上に実現しようというフレーズはよく似合うような気がします。組織づくりについて考えながらも日本からの参加者が国際チームの主要な部分にしっかりと加わって活躍していただくことを願わずにいられません。

富山では久しぶりに温泉につかりとてもうれしい気分を味わいましたが、何と云ってもお会いした方々の一人一人が ITER を自分のプロジェクトとして考えていただくきっかけになったと思えることが無上の幸せです。

カダラッシュにて
ITER 機構長予定者 池田 要
(2006年7月4日原稿受付)

